

「性の多様性」授業における「学び」とは？——クィア・ペダゴジーの意義と課題

渡辺大輔

埼玉大学 基盤教育研究センター

1. クィア理論

- ・「細分化された数々のセクシュアリティのあいだの差異、あるいは各セクシュアリティをめぐって交差する多様な差異を浮かび上がらせ、差異そのものについて思考を深化させるための概念」(河口和也『クィア・スタディーズ』岩波書店、2003年)
- ・強制「規範性」を問う姿勢、「アイデンティティを偶発的と見なし、間発話者のみならず、発話者内の差異に焦点をあてる理論」(クレア・マリィ「イデオロギー・アイデンティティ・ディザイナ―言語とセクシュアリティ研究を問う」小玉亮子編『現在と性をめぐる9つの試論 言語・社会・文学からのアプローチ』春風社、2007年)

2. クィア・ペダゴジー

- ・ブリッツマン(Britzman) “IS THERE A QUEER PEDAGOGY? OR, STOP READING STRAIGHT”., EDUCATIONAL THEORY; Volume 45,1995

クィア理論：慣習や規定の限界や、さまざまな慣行や規定が転覆的（攪乱的）な行為（パフォーマンス）や言及、不自由を引き起こす方法を予期し、アイデンティティを問題化し、異性愛がいかに自然なものとして正常化されるのかを明らかにするもの

→「知ることを退ける」ことや「知るに耐えないもの」とは何かを理解し、意見を述べるような教育的手法を提示する（「無知」は「知」の効果として分析される）

1) 「限界の学習」(the study of limits)

- ・どう解釈するのかではなく、何が（身体や人間性を）解釈可能とさせているのかを問うということ
 - ・何が思考を停止させ、もしくは思考を可能にさせるのかを問うこと
 - ・社会からの影響を大きく受ける関係としてのアイデンティティ、さまざまな関係性のなかで再構築され続けるアイデンティティ
- もし教育のカリキュラムがアイデンティティ形成の基盤を要請するものとして考えるならば、そこでの課題は、アイデンティティ形成の機会や選択肢を増やすことにあり、それを閉じることではない
- しかし、自己肯定感が欠如している者への救済策として「きちんとした」ロールモデルの提示などの試みは、不安定な差異のある関係性や無知の多様な形態に対処できない
- 「知るに耐えないもの」とは何かということ的思考することは、知に対する抵抗ではなく、むしろ抵抗の様式としての知として、教育によってもたらされる知を再考すること

2) 「無知の学習」(the study of ignorance)

- ・「主流」が自然化され標準化されることで、その外部について「無知」であることが許される。それによって、縁辺化された主体が消去されたり外部として固定化されたりする。したがって

その固定化されたアイデンティティを問うことが課題

- ・「私たち／他の者たち」というアイデンティティの監視（無知である私たちには「知る権利」があり、私たちの外部に固定された他者は「告白する義務」がある）

→知や無知、知ることを前提とした主体をつくりだす教育という営み自体が、知る主体が無知でいることが許されている現状をどのように問い直すか

3) 「読む学習」(the study of reading practice)

- ・「限界の学習」「無知の学習」を可能にするものとしての「読む学習」
- ・アイデンティティを同一化の反復として矮小化して捉えるのではなく、自己との対話をとおして、異質性や差異、分裂や混乱を発見・発掘し、それを承認していくことから始める実践
- ・他者や同質なものとしてのアイデンティティを読むのではなく、必然的に「他者」を通して行われ、または「他者」のなかで行われ、差異のあるものや、自己のなかでの差異を読むことである
- ・主流であるものの自然化や標準化、自己を何かと同定し証明しなければならないと迫る力学を越えて、学習者にアイデンティティの確証を無理にさせるのではなく、アイデンティティとしての差異を認識していくこと

3. 教育実践の成果と課題

1) 「性教育」カリキュラム

【中学1年】①いのちの誕生／②「らしさ」を問い直す

【中学2年】③性の多様性（1）／④性の多様性（2）

【中学3年】⑤避妊と中絶／⑥恋愛とデートDV（1，2）

- 総合的な学習の時間に「人権教育」として実施
- 担当①②保健体育科教員または担任、③～⑥保健体育科教員
- 保健体育で身体・二次性徴（中1）、性感染症・HIV/AIDS（中3）を学習
- 生徒の知識と意識を把握するために事前／事後アンケートを実施
- 「性の多様性」については授業後に生徒有志との座談会を実施

2) 授業の流れ

【1時間目】

<本時のねらい>

- ①性同一性障害や同性愛についての偏見・思い込みを認識し、身体的性、性自認、性的指向についての理解を深める。
- ②カミングアウトする／される関係やその思いを考えることで、多様なセクシュアリティの問題を自分の問題として考えられるようになる。
- ③異質な他者と出会ったときの意志決定（行動）において何が必要かを考える。

1. 自分たちの現状を知る（事前アンケート）

- ①「知ってるつもり」な自己の発見
 - ・「同性愛」「性同一性障害」という言葉は知っている。違いなどの説明はできない。
 - ・「異性愛」という言葉を知っているのは約半数。

②学習する理由をみんなで確認

- ・よくわかっていないのに、「笑い」にしたりしてきた私たち
- ・自分自身を指し示す言葉も知らない私たち

③学習意欲の喚起

2. DVD『もしも友だちがLGBTだったら』（新設Cチーム企画）視聴

①性の多様性の基礎知識

→何通りもの性が考えられるのに、その中の2通りがなぜ「普通」？

②なんで明日香（レズビアンの高校生）は親友の真紀にカミングアウトしたの？

③真紀はなんで「言ってくれてありがとう」と言ったの？

→「カミングアウト」の世間での使われ方、権力関係を問う

④おばあちゃんにわかってもらうにはどうしたらいい？

→「知る」「学ぶ」ことの重要性

⑤明日香に聞きたいこと

【2時間目】

1. 性の多様性の基礎知識（復習）

①「異性愛」「シスジェンダー」を初めて知る生徒

→これまで何て言ってきたか？ 何も言わないか、「普通」

②「表しきれない」「秘密」も盛り込む

→セクシュアリティを名づけること、明示しなければならないことへの抵抗

2. なぜこの授業をやったのか（担当教員と支援講師の対話）

→担当教員がこれまで学んできたプロセスの開示

3. 支援講師のカミングアウトと生徒との対話

4. まとめ

①保健体育の記述を読む

→私たちの「知」はどこから来たのか。「学校知」の問い直し？

②人権

2016年9月たんぽぽ中学校2年生

<p>1. 気づき</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何をきっかけで、好きになったのか。だれかの影響であったのか。男の人は、もう好きになれないのか。 ・いつからレズビアンにめざめたか。 ・いつから自分がレズビアンだと気付いたのですか。 ・自分自身のことど一思う？ ・女子を好きになった時、自分がきもち「わるいと思わなかったのか。結こんしたくないのか。 ・同性愛って何ですか？ 	<p>2. 困難</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大変な事。将来の事。 ・周りの目など気にしたりはしないんですか？ ・手をつないでいるのを見られてはずかしくないのか。 <p>3. カミングアウト</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カミングアウトしたときの気持ちはどんな気持ちでしたか。 ・おばあちゃんと父親に言うときはこわくはなかったんですか？ ・周りの人にばれたらどうしますか？
--	---

<ul style="list-style-type: none"> ・人に話したいと思うのか（女性が好きなことを） ・おばあちゃんをどうしますか ・亜美の親に付き合っているのを反対されたら、どうしますか。 <p>4. 結婚</p> <ul style="list-style-type: none"> ・けっこんしたいですか？ ・結婚してみたいですか？ ・けっこんしたいですか？ ・どうやって結婚するの？ ・結婚とかどうするのか。子どものこととかも 	<p>5. 子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもをどうするんですか。（子どもをうむこと） <p>6. 将来</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来はどうするのか。 <p>7. その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・なぜホモはさべつようごなのか
---	---

→これらの質問にどのように答えるか。

いかに「シスジェンダーかつ異性愛／トランスジェンダーまたは同性愛」の境界線を攪乱できるか。

3) 生徒たちのその後

①教員にカミングアウトする生徒

②新任教員に「性のグラデーション」を教える生徒

③保護者に授業の内容を教える生徒

→「教員・保護者／生徒」＝「教える／教えられる」の権力関係の転覆？
「知」の獲得の喜び？

④クラスメイトのカミングアウトを受けとめる生徒

⑤やんちゃな生徒ほど響く（感想を書く、保健室で本を読む、挨拶をする）

→「メインストリーム」の問い直し？ 「周辺」のエンパワメント？

⑥「性教育」を行うと生徒が落ち着く（校長）

→学校で「性」を語ることの意味

4) 授業のポイント

①担当教員がこのテーマにいかに向き合ってきたか

②支援講師は担当教員の長年の知り合い

③共同での授業づくり

5) 課題

①「貴重な体験」「いい経験」という感想からどのような学習へつなげるか

②「明日香に聞きたいこと」は、「知る／知ってもらおう」構造の再生産か

③教員の「私にはできない」「あの先生と講師だからできる」をどう考えるか

④「異質な他者と出会ったとき」という「ねらい」の設定は適切か。「異質」な者は誰か。

4. クィア・ペダゴジーの可能性？

- ①「何が学習されるべきか、いかにこの知識を教えるかといったような教授に関する共通の関心に焦点を置くかわりに、教師／テキストと学生との相互作用においていかに我々が知るようになるか、いかに知が産出されるかという問いからクィア・ペダゴジーは始まる」(ルーマン、1998、森山訳 2009)
- ②①クィア・ペダゴジーはゲイ男性やレズビアンといったアイデンティティを固定化したり、そのどれかに特化するといったことをせず、流動性や多様性を賭け金とする。したがって、②クィア・ペダゴジーはジェンダーストレートな異性愛者をその対象としないわけではない(どころか時に積極的に対象とする)。また、③知＝権力とジェンダー・セクシュアリティの根源的な結びつきに着目するゆえ、④教師が学校・生徒に知識を教える、というペダゴジーのモデルに対して懐疑的な立場をとる。(森山至貴「クィア・ペダゴジーという問題系」『論叢クィア02』2009)
- ③ジルーの境界教育学 (border pedagogy) * 批判的教育学
- ・ 学習者たちが、各自の階級／ジェンダー／エスニティーといった文化とアイデンティティの境界枠を意識し、それに規定されたパースペクティブの差異(ものの見方や判断の基準の違い)を交換し合いながら、1人ひとりが自身のアイデンティティの境界線を引き直していくことを目的にした学びの世界
 - ・ 自身のパースペクティブを限界づける文化の批判的吟味と、アイデンティティを限定的に枠づける境界線の絶えざる引き直しを行わせていく。
 - ・ 学び手は、多元的に焦点化される視座を獲得していく
- (木村元ほか『教育学をつかむ』有斐閣、2009)
- ④多文化教育(多文化的・社会構築主義的アプローチ)
- ・ マジョリティの枠内にある人々の視点で形成されてきた公定の知識体系や常識を、批判的にとり扱うことを可能にしている
- (木村元ほか『教育学をつかむ』有斐閣、2009)
- ⑤実践というものは、その時・その場の自己判断にもとづいて、子どもとの関係ならびに世界との関係の変革に向けて自分自身を投企する行為(竹内常一『おとなが子どもと出会うとき 子どもが世界を立ちあげるとき』桜井書店、2003)
- ⑥ジェンダー化されてきた経緯とその仕掛けの意味するもの、そのために不利益を被っている事実等を子どもとともに発見していくような学びを構想していきたい。(坂田和子「ジェンダーフリーは奪わない」『生活指導』2003年6月号)
- ⑦トロント(カナダ)「トライアングル・プログラム」の意義
- ・ セクシュアリティを理由に排除された高校生が通う公的高校プログラム。教職員も概ねセクシュアルマイノリティ当事者。地域の教会の空き部屋を利用。現在3クラス設置。地域とも協力し、職業体験学習なども行う。現在はここで卒業単位をそろえられる。
- 発達課題とセクシュアリティ(セクシュアル・アイデンティティの形成)
- 発達課題とクィア・ペダゴジー